

# 統一團報

目次

- 一 本誌大改革豫告……………本多 日生
- 一 護法論……………
- 一 一部部總隊の比較と宗教……………影山 謙二
- 一 伊豆伊東專門及期講習會日記……………張 大吾
- 一 末法時機相應王修親三對有縁の大導師……………
- 一 ……南山 道人
- 一 統計學上自殺を論じて念佛一門に告ぐ……………窪田 真二

## 統一彙報

- 一 第二回本化門下夏 講習會彙報……………奇 峰 生
- 一 岡山通信……………中川 事顯
- 一 岡山第二報……………全
- 一 第十九教區通信……………横 山 生
- 一 千葉縣連教日誌……………岡 行 員
- 一 圓本法華宗主師者の交送……………

## 廣告數件

第八十九號

明治三十五年九月十五日發行





「宗教文學」

とは津々の筆、光明文學の趣味を稱ふ、其

「來者不拒」

とは大に門戸を開いて諸方面の投書を受容す、其

「統一團報」

とは各地同志が活潑なる運動の報告を載す、其

「顯本の光」

とは諸大家の説教演説を請ひて掲ぐべく、時に或は當今文壇名士の光明小説を掲載することあるべし而して編輯には

本多日生 清瀬華城 今成北雷 石渡江東 窪田孤松 上田不新 鈴木文寧 井村悔也

小川ゆたか 山根青村 松尾忍水

等同じく責任を以て之に當るべく

小林日 至 田邊善知

師等に於ては更に一段の高説を授せらるべく

内藤智厚 萩原啓門 能仁事一 山名木信 原田容廣 影山懸雲 廣部永真 笹川真應 木村乾中

等及盛岡 千葉 關西等の諸團友は同じく諸種の稿を投せらるゝこと更に新面目を施すべし、團友

諸士幸に來るべき九十號を親よ焉、

統一團々報部

本會事自今以後本誌を以て諸種の報告等可致に付本會員は必ず本誌を購讀候様致度及廣告候也

明治三十五年九月十五日

東京淺草區吉野百九番地

僧俗同信會

會員諸君

統一團報第八拾九號

(明治三十五年九月十五日發行)

護法論

論

(明治三十五年九月十二日品川妙國寺に於ける龍口法難會席上演説)

本多日生 演説

山根顯道 筆受

本日は日蓮聖人の法難中最も記憶すべき、壓制政府の爲に聖祖が頭を刎られんとせし相州龍口大法難の聖日である、夫に就て今日は護法と云ふ事を囁して見ようと思ふ

夫は我祖日蓮聖人が龍口の刑場に引出されて、將に頭を刎られんとしたは何の爲であるかと云へば、別段其當時の法律に觸れた譯でもない、寧ろ其當時の法律は僧侶を保護して重刑に處すると禁じて有る、ですから重野博士の如きは當時の法律上からのみ推測して、日蓮聖人龍口法難は全く無根の事であると論じた、が其重野博士の推測は誤た推測で、北條政府は畏れ多くも天皇陛下を左遷し奉た事すらあつた、千歳不滅の罪惡を犯した北條政府は式目五十一條を以て法律として政治を執たが、決して天皇を流竄すると云ふ法律のあり得べき筈がない、然るに夫をも斷行した無道の政府である、からして一介僧日蓮を頭の坐に引据へる如きは易々たる事と思ふて居たに違ひない、日蓮聖人は下山抄に此事を論じて、餘りに人の憎さには式目を破て迄日蓮を刑罰に處した、是は大にしては正法の行者を辱むる次第で、又一面には五十一條の式目に背反し、王法佛法共に違背せる無道暴政の骨頂なりと論斷せられてある、畢竟時の政府は規定が無くても壓制武斷を以

て我意を遂行したのである、尙は一層尅實して云へば北條家の關知した事でもない、全くは内管領頼朝が其自己の信する宗教の反對者を獨斷的に陥擠したのである

で其頭の坐に蒸へられたのは、決して時の法律に抵觸した爲でなく、一意専心佛法の邪正を糾弾せられた爲に反對者の陥擠排斥を受けたので、所謂宗教上の信念の衝突である、其衝突は何處より來るか云へば、主義擁護の爲に來るのである、則ち法なり道なりを能く守て擁護して行ふと云ふ處から來たのである、依て一言を以て之を磨へば、龍口法難は主義擁護の爲に來たのである、法難とは法を擁護する爲に反對者の迫害を受ける事と云ふので、近來は此法難と云ふ語を誤解して譯もない事に迄誤用されて居る、自ら愚にして輕躁事を起し法網に觸れて而も得々然として法難を以て任じて居るものがある、愚昧の沙汰と云ふの外はない、宗祖は決して時の法律に觸れたものでない、死身弘法の大精神より、主義の擁護に努め爲に法難に逢ひ給ひし事は一點疑を容れざる次第である

先づ法と云ふ事に就て論じて見ようが、世人は稱して佛法と云ふが、何が法であるか、何が佛法の實跡であるか、其は畢竟法と云ふ意味が從來種々に解釋せられて居るから、從て種々の誤解を生じて一も正鵠を得ないのである、

佛教の原始には道德上の教訓即規律を法と云ふて居た、今日の所謂法律規定と云ふ様な意味合である、斯る場合には法は澤山に駁るべきものとなるのである

其から宗教上の式目即行法と法と解して居る、種々なる形式を指すので、或は斷食の法とか無言の法とか不眠の法とか、種々修行の上に具た儀式がある、新舊の法度病除けの法、畏等でもある

が、それ等は皆悉く末である宗教の屬性である、佛法の本性本體たる法とは左様なものでない、唯一の法體と云ふものがあるので、一切の佛は其法によりて悟を開かれ其法に由て活動を顯されて居るのである

達磨は……則ち法と云ふ事は色々に解釋されてあるが、其究竟の説明は正しく法華經に顯れて居るので、則ち妙法なるものは其である、妙法とは宇宙の大法……宇宙の實跡……絶待上に於ける唯一の實跡である……此實相に迷ふを衆生と云ひ、此實相を遠觀し給ふたるを佛陀と云ふ、染淨苦樂の分數點も全く此處である、依て三千諸法の全脈に達して夫と上から見た處が妙法である、悟て始めて生ずるものでもなければ、迷ふて全然無くなるものでもない、背かんとしても背き切れぬ、迷悟染淨悉く此大法の中に活動して居るのである、それが法華經の中にかく説てある

十方佛土中、唯一乘法、無二亦無三、除佛方便説

十方とは東西南北四維上下で、世間で云ふ宇宙とか天地とか云ふ語の意味だ、が世間の術語は言葉が餘り小すきると思ふ

導く方便の爲には色々な法となるが、之を結束し來る時は唯一の妙法にてあるので、唯一乘法無二亦無三と説き給ひてある、法は決して二なく亦三なく、唯一乗の妙法あるのみだ、一乗とは賢愚老幼男女上下共に開悟する所の唯一の妙法である

應病與藥と云ふ語を頻りに振舞すものがあるが、それは法其ものを方便視する諸宗學者の大誤謬で、除佛方

便説の金言を知らないからである、醫者の薬を投ずるは其目的健全無病にあるので、唯應病與藥うれが何の爲になる、醫者の目的は健全無病の處に至て一致するが如く、法とは導きではない、法とは曲つたものを直はし、迷妄にあるものを開悟せしむる活力を有す、若しも諸宗の云々如く唯極宜ふ計りなら誠につまらんものである、**法を中心として轉述せしむべきものである**、然るに佛教徒の多くは法を輕視して機根を中心とし應病與藥杯と血迷ふて居るから種々の迷信を生じ天狗野狐淫祠邪教の陋態を呈するのである、今日の佛敎界の有様は最も誤解されたるものが最も盛大に成て居る、痛歎の極である、念佛宗でも機法の關係を顛倒して居る、地鉢如何なる機類のもので絶待圓滿の法に救はれるので、經に除佛方便説と説かれたのはうれである、方便とは暫く用ひて後に永く廢すべきもので、但以假名字引度於衆生の聖語は、假説的に誘引の爲に暫くは用ふるが、其目的は佛の悟佛の智慧より出たる唯一の大法に接觸せしむる他はなきものである、阿彌陀、藥師、決して其が實跡のあるものでない、ですから阿彌陀の本事因縁が幾多の説に敍れて居る、彌陀三部經に説かれた處では、世自在王佛の御許に法藏比丘として四十八願を立て、五却思惟十却正覺とあるが、法華經化城喻品には大通智證佛の十六王子の一人で、我名を稱へよとは云はすして諸佛所師の妙法を宣傳されてある、又悲華經に顯はれるた彌陀は瑠提藍國の千人の王子の一人で、自分の力足らずとて、善良のもののみを救ふと云ふ極弱ひ願を立て居る、其他數へ立てれば十種の彌陀がある、而るに其中で法然親鸞は唯三部經によりて稱名往生の點みを取て居る、決して佛法の極致に達したものと云へない、佛法を學ばんとするには一佛一佛の因縁に目が眩む様では駄目だ、恰かも伊藤侯井上伯等の歴史のみを研究したとて、國

家の組織は一向分らんのと同一一般である、萬古不變の大道唯一の大法とはうんなんものでない、千佛萬佛一致合夥せる、絶待無限のものである、餘の二は即ち眞に非ずとて、その佛も皆うれによりて佛道を成せられたのである、幾つものある道なら切れのつまらんもので、圓滿とか無限とか絶待とか稱すべき大道は唯一の妙法の外はない、佛法の道が幾つものあると思ふのは、理想の最も低ひつまらん考へである、哲學上に比例するも哲學の原則が幾つものあると主張せば誰か其愚に驚かざらんやだ

以上は方便品によりて證明する事を得るのですが、本門善量品に至りて尙は一層尙實に論斷せられてある、則ち遂門開三顯一の一乘法を、更に開述顯本して、

### 諸佛如來法皆如是

と示された、其法とは顯本の妙法である、顯本の妙法とは一念三千生佛一如の大法である、諸佛如來の能生能養能成能養みな此法によりて活動して居るのである、法とは經をじやぶ／＼讀むのを云ふのでもなければ幾つものあるべき筈のものでもない、佛教の耶穌教に異る處は正に此法中心の主張にあるのだ、法の説明が完全の點にまで達して、而して是れを語りし人格の佛陀と契合一致する所以を説き、茲に法佛圓滿不二の妙談を聞くを得るので、世界の宗教中獨り此佛教が此異彩を放つて居るのである、而して佛教中特に善量品にのみ此究竟の大法が顯はれて居る、天台は之を

一身即三身なるを名けて秘となし、三身即一身なるを名けて密となす

と説かれ、日蓮聖人は

一切經の中に此書量品なくは、天に日月なく國に大王なく山河に玉なく人に魂の無からんが如しと論斷せられてある、佛教が單に卷帙の多きに誇り義門の多きに誇りつゝあるは、是れ弊害の最も大なるもので、法に對する唯一絶待の説明なかりせば……則ち法華の書量品なかりせば、佛教は至竟無用の贅物である、山高きが故に貴からず、大男物身に智慧が起り兼ねで、支那の危大國政の統一を欠き徒らに東洋の災ひとなれるが如く、佛教亦以て如是で、分裂的諸種の説明に安んじて統一的法華の究竟説明を知らずんば、分裂亦分裂其累は國家と人民に及ぶべく、而して國民の役介物として打捨つるは、如何にも惜むべきの咄ではないか、進んで此法を護持し發揚して、そうして國家人民に一大効果を光被すべく大々の活動をなさつたのがそれが日蓮聖人の大理想大行動である

法とは先づ如此考へて、夫から其法をもちたてゝ行く事は法華宗の特性たる事を論じようと思ふ  
法華宗以外の宗教では、佛陀に感謝し又は神に感謝する事のみを知てられ以上を説かない、法華經には進んで護法と云ふ事が示されてある、念佛宗では佛恩報謝と云ふが、法華宗では護持正法と云ふ則ち法を中心として……一歩も枉ぐべからざる妙法ある事を眷々服膺せしむるので、感謝とは云はずして護法と云ふ、之れ着眼すべき要點である、日蓮聖人の立正安國とは、唯佛に感謝するに止まらずして正法を確立するの主意である、

此點から日蓮聖人は念佛門徒と近くは所依の三部經に背き遠くは諸經中王の法華經を誹謗すと論斷せられた所依の三部經に背くとは念佛門徒等阿闍梨に阿闍梨名すと雖も、唯除五逆誹謗正法の誓文に背き正法の最上

最高たる妙法を誹謗するにより阿闍梨の本旨に背くものなりと仰せられたので、遠くは法華經に背くとは……新經とは文字を指すにあらず、經とは道をとこし顯はしたもので、文字に背くにあらず、其經所詮の大法に背ひくの謂である、宛かも憲法違反と云へは憲法の文字に背ひくにあらずして、憲法規定の精神に背ひくを意味すると同じである、耶蘇教徒が頻りに佛教徒は經典の文字に執着すると批評するが、そんな事は眞正の佛教徒には誤想して居らぬ、法華經所詮の妙法に背ひくと否を重視するのである、我法妙難思と説き絶言歎とたへ、言語道斷心行所滅と述べ、不可思議と呼ぶが如き、皆其法華を稱揚したので、あつて此法に背ひくものを責めるのは當然である

又國は法に由て盛へ法に由て衰へるもので、中心たる法の隆否に大關係を持て居るのである、世間に於て王道と云ふ事があるが、是は極めて大切な事で、親でも君でも此道に背く事は出来ぬ、親が大切だと云て子が孝行をする、すると親が馬鹿に力身出して無茶な事したらどうする、我宗でも過般來管長の老我に乗じて或一部の者が老管長を擁して動もすれば宗規に反したやり方をした爲め、非常に紛議を生じ終に管長の辭職となつたが、そんな横着ものでも、不如法なものでも我味方のものは耐せず、そんな正義のものでも氣に入らぬものは耐すると云ふ様な、そんな無法が管長の名の下に行はれたらどうです、斯る場合には之を抑へる道とか法とか云ふものが無ければ施すの道がないではありませんか、  
又開目抄に日蓮聖人の始て決心せられた時の有様が左の如く記されてある

此を一言も申出すならば父母兄弟師匠國主の王難必ず來るべし、いはずば慈悲なきに似たりと思惟するに

法華經涅槃經等に此二邊を合せ見るに、いはば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮べし、いふならば三障四魔必ず説ひ起るべしと知ぬ、二邊の中にはらふべし

身命を抛て正法を護持すべく決心せられたので、法華經の經文とは、勸持品の我れ身命を愛さず但無上道を借ひとの命言である、聖人は或御書に此事を斯く仰せられてある、命は惜みても惜み遂くべからず、徒らに曠野に捨てん身を法華經の御爲に捨るならば、更に大なる金剛不壞の身を得べしと、どうです日蓮聖人の護法の決心は斯くの通りであります、道が亡ぶれば我も助からず世は闇黒となる、よし身は刀杖に寸断せらるゝとも、どうしても此護法の大責任を果すべく決心せられたのである、涅槃經の經文も同意味であります、法華宗徒は是非共此大精神を承け襲ぎて、身は輕し法は重し身を死して法を弘む〓〓との大覺悟を定め法を中心として活動せねばならぬ

更に進んで開目抄に涅槃經の貧女の譬が擧げてある、うれば斯うである

貧女あり居るに家なく痛苦飢渴に逼られ、乞食して他の客舎に止り居る中一子を産んだ、而るに客舎の主  
人其貧女を逐ひ出した、主ひなく産後の身に愛兒を抱て他國に流浪し、道中風雨に遇ひ寒苦並ひ至り、蚊  
虻等毒蟲の爲に蓋され、剩へ恒河を渡らざるべからず、兒を抱て其水に漂ふた、子を捨て、我身獨りな  
ら或は渡れるかも知れんが、子を愛するの一念捨て去るに必ひず、終に母子共に漂流して死んだ、

諸君此場合を理想して御覽なさい、佛弟子の信念は正法を守らんと欲せば、彼女人の子を思ふ一念命を捨てたと同じでなければならぬと云ふ教訓である、彼貧女は子を思ふ慈心によりて梵天に生れた、佛弟子は身と捨て、法を護れば成佛疑ひなひ、不求解脫解脱自至とは此經文の結語である、法華宗の僧俗はどうしても此經文の如くして行かねばならぬ、自分計りの爲でない、親も子も一切衆生も此法の爲に救はれるのであるから處が現在日蓮門下各教團の僧俗、十の八九は此法華經に背き教主釋尊に背き先師に背て居る、實に逆路伽耶陀の罪人である、獅子身中の蟲である、國民の理想が今少し進んで來れば此事は直ちに分るのだから、悲哉一般國民は此正義の聲に耳をかさぬ、歎はしい事である、佛教徒にして佛陀に背き日蓮門下にして日蓮の罪人となりつゝあるは實に悲怒の極ではないか

尙ほ護法も云ふ事に就て涅槃經には  
正法を護持するが爲には小節に拘らず、

と説てある、小節を捨て威儀を捨て、一意専心正法を護持すべきは佛弟子の本領で有て、日蓮聖人の大理想は之を遂行せられたのである、何處迄も法中心〓〓根本の護法の大精神がなければ、千百の議論あるも畢竟贅論である、唯形式をのみ彼此する其が何になる、今の學者は唯徒らに學者を氣取て居ても、佛教を見る眼は實に低ひ、お咄しにならなひ、うれを兎や角嬉しがつて居る國民は、偽善を好む劣等の國民と斷言するに憚らなひ、學者でも博士でも佛教に對しては愚者と同一である、

佛教の本質は法と不二一軌の教旨にあるので、其法は哲學上の真理原則と云ふ如きものにあらすして、何處迄も法佛不二の實體を指すのである、個々の佛と佛と衝突する様な事をして、其で佛教が何處に立つ佛とは無上道(妙法)を證得せられたるもの

菩薩とは無上道を修行しつゝあるもの

神とは一面此法を證し一面此法を守護するもの

是が正解である眞面目である、依て佛陀菩薩神明の間には何等の衝突なく、皆悉く唯一の妙法に契合せるものである、世人の言ふが如く道とか法とか云ふものが、どう幾つもあると許すは、それは道でも法でもない悉く「ベケ」である日蓮聖人は六百年前此大法を覺知して、護法の大精神、而強毒之の大慈悲を遂行せられたのである、

然るに日蓮門下の現在はどうである、野蠻未開の當時に逆戻りして、丸で「ブラマ教」ソックリと云ふ有様でないか、中山の鬼子母神——あれは人を喰ふて居た鬼恰かも臺灣の生番の如きものだ、それが妙法によりて餓鬼道の苦を免れたのではないか、うんなものを中心として道が何處に立つ、厄除の祖師——祖師を以て自己の口腹を肥す道具にして居る、祖師を侮蔑した背祖師敵の大罪人である、佛教に四十二の厄杯うんなものがあるものか、丸で外道の弟子である、昔はうれで通つたか知らんが、文明進歩の今日、斯る迷信を鼓吹するとは實に沙汰の限りである、國民は一般に一大猛省をせねばならぬ、終りに臨んで一言す、實に忘るべからざる聖祖門下の大責任は護法の二字である、

(完)

注意



聖經に云く正法を護持する因縁を以ての故に此金剛の身を成ずることを得たり

都鄙趣味の比較と宗教

▲農村は最も布教好適の處なり——乞ふ力のよや本宗の教家學者▼

▲予か——致派寺院に於ける演説——敬虔なる「御妙判」の拜聽者▼

影 山 謙 二

忍水詞兄

予は、君か知れる如く、もと農村に生れて、犬馬を驅りつゝ、山岳川流の間、粗野軍調の生育に人と爲りたるものには候得共、漸く人生哀樂の一端を解するに臻りし比ひ、一度笈を負ふて厥然貫を辞して以來、東西に漂流すること十有餘年、其間所謂都會状態なるものに就て少か體察する處ありたりき、然して昨冬、思ひきや垂乳根の命のもだすに由なく、終に愈々故山に久闊の情を叙し舊知の水に足を洗ふに造りて、予は再び田舎生活の人と相成申候

忍水詞兄

田舎生活、於戲田舎生活、如何に樂しの田舎生活よ、予か過去十年の漂遊、實は俗氣紛々、複雑極る都會生活に寝や鑿き足るの感ありしものにて候、流車あり、馬車あり、蒸氣ある都會は、不義、罪惡、虚飾、虚榮、瀟々として吾人の心耳を襲ふ處にて候、ビール、にブランド、ベルモット、乃至百菓、珍珠、洋食、佳肴採るに任せて喰ふに便ある都會は、吾人か最終高等の慾望たる精神の安撫を將るに甚た不便なる處にて候、大厦、高樓、犬牙錯雜、巍々然、費々乎として、眩々、吾人の目を照す都會は、宇宙、太虚、自然の大氣か、斷えず吾人を靈的に感化せしむとする、天の妙機を透殺する處にて候、紅燈緑酒に、淫樂の聚々たる都會は、正義の叫びの聲の、耳に入り難き處にて候、浮華、ハイカラの一流か、傲然として馬車の軋に、蹴り立つる百尺紅塵の塞々たる都會は、かの無始久遠切來の福音たる「ひいさ來る松の嵐に埋れて斷えまかちなる谷の水音」



乃至また

『門巷蕭條夜色悲、鵲歸聲有月前枝』

乃至また

『開門忽驚山爲海、萬壑雲濤露一峯』

乃至また

『修竹三竿詩人家、梅花百株高士宅』

乃至また

『詩趣を遠ること百歩、千歩雷ならざる處にて候。』

乃至また

『田舎は、宇宙の自然に接すること、最も近き處にて候。』

乃至また

『神意を探るに最も便利なる場處にて候。』

乃至また

『静に學理の思索に心を委ねる者を容るゝに好適の場所にて候。』

乃至また

『草木、百花の成長を見ては、無心に自得し、雲騰り、雨施きては、風光霽月の清景に對して宇宙の大文章に、識らず、知らずも偉大の感化を惠まるとの境涯、是れ豈に哲學者の最も喜ぶ處にて有之候はざらんや。』

乃至また

『此等農村詩人に依て發吟せられたる、詩趣、詩想、詩興は、農村に身を置く者の始て、其天真爛漫、高雅の私奥に會すべく、市街的文士輩の、決して是に預る能はざるものに候。』

乃至また

『宗教家の最も貴ん處は、其志操、安壯高潔にして、且つ恬澹寡慾、苟も人慾の私に左顧、右盼せざるに在り、而して農に依て得る處の凡ての私潤は、人より受けたるものならず、實に天來の餘慶に外ならざれば、其純正潔白なること、商工のそれと素より比すべくもあらず、予はルーラルカ農を以て『天國より直接に天降りし聖業』となすを見て、眞に眞理を喝破し盡したるを信するものに候。』

乃至また

『來、農民に自主心の旺なる、秋毫だも外に求むるの劣情を掃むなく、含哺鼓腹、寝ぬむと欲して財を蓄へ、勤かむと欲して則ち働き、一度ひ屋舎を出るや、其交る處のものは、悉く成な天地の作用にして、靈變不可思議、曾て人力の左左し能はざるを察て、終に天を畏れ、地を敬するの觀念、此に發し、宇宙久遠の靈威を崇拜するの思想、此に生ず、去れどにや、増遇に因る必然の後天的習性として、『其中衆生悉是吾子』の具體的發展は、多く農村の間に見受らるゝやに相覺申候。大覺世尊の滅を示さるゝや、靜に跋提河畔に眠られしを聞けり、聖日蓮が、宗旨建立の偉業を竣へらるゝや、錫を延山雲深き處に藏められしを聞けり、其他耶蘇基督、カブール、トルストイ、中江藤樹、西郷南州、東西、古今、幾多英傑義人の田舎を愛したるを耳にす、予實にさういふと思はれ候、而して更に予が田舎を愛する所以の理由は、厭世的、孤獨の樂天地としてには無之、今日の社會觀上、事功的、社會發展の意味に於てに有之候、昔は、テール一流の義人か山野松林の間に崛起して、警呼應同、遂に瓊西國の社會を其腐敗の極底より救ひ揚げたるを聞けり、又、近くは我が嘉永安政の比ひ、水戸藩義士、一般の警吟『薩摩箇八重の潮路は遠けれと大和心はかはらざりけり』が、遂に薩摩建兒の應起となり、維新の改革、王政復古の鴻業を樹立したるは、最近の歴史か吾人に語る處に御座候、況して我々、一乘の妙宗徒か、妙法五字の旗に正義の劍を翳し、道義を踏て正義を鳴らし、以て、一天

老幼を慈きて昔時の景狀を語り、見は亦空中に樓閣を築きて精神を想像し、情は情と合し、意は意と結ひ、圖繪の情致、乃至田園の冬冬の景狀を賦したる一什の如きは、今は久しく人口に膾々たるものに御坐候、凡そ此等農村詩人に依て發吟せられたる、詩趣、詩想、詩興は、農村に身を置く者の始て、其天真爛漫、高雅の私奥に會すべく、市街的文士輩の、決して是に預る能はざるものに候、宗教家の最も貴ん處は、其志操、安壯高潔にして、且つ恬澹寡慾、苟も人慾の私に左顧、右盼せざるに在り、而して農に依て得る處の凡ての私潤は、人より受けたるものならず、實に天來の餘慶に外ならざれば、其純正潔白なること、商工のそれと素より比すべくもあらず、予はルーラルカ農を以て『天國より直接に天降りし聖業』となすを見て、眞に眞理を喝破し盡したるを信するものに候、『畑打や五石の粟のあるじ顔』由來、農民に自主心の旺なる、秋毫だも外に求むるの劣情を掃むなく、含哺鼓腹、寝ぬむと欲して財を蓄へ、勤かむと欲して則ち働き、一度ひ屋舎を出るや、其交る處のものは、悉く成な天地の作用にして、靈變不可思議、曾て人力の左左し能はざるを察て、終に天を畏れ、地を敬するの觀念、此に發し、宇宙久遠の靈威を崇拜するの思想、此に生ず、去れどにや、増遇に因る必然の後天的習性として、『其中衆生悉是吾子』の具體的發展は、多く農村の間に見受らるゝやに相覺申候、大覺世尊の滅を示さるゝや、靜に跋提河畔に眠られしを聞けり、聖日蓮が、宗旨建立の偉業を竣へらるゝや、錫を延山雲深き處に藏められしを聞けり、其他耶蘇基督、カブール、トルストイ、中江藤樹、西郷南州、東西、古今、幾多英傑義人の田舎を愛したるを耳にす、予實にさういふと思はれ候、而して更に予が田舎を愛する所以の理由は、厭世的、孤獨の樂天地としてには無之、今日の社會觀上、事功的、社會發展の意味に於てに有之候、昔は、テール一流の義人か山野松林の間に崛起して、警呼應同、遂に瓊西國の社會を其腐敗の極底より救ひ揚げたるを聞けり、又、近くは我が嘉永安政の比ひ、水戸藩義士、一般の警吟『薩摩箇八重の潮路は遠けれと大和心はかはらざりけり』が、遂に薩摩建兒の應起となり、維新の改革、王政復古の鴻業を樹立したるは、最近の歴史か吾人に語る處に御座候、況して我々、一乘の妙宗徒か、妙法五字の旗に正義の劍を翳し、道義を踏て正義を鳴らし、以て、一天

かの、曉星を戴て出て、月を踏て家路に迫る農民等か、其日常、事とする處は、概ね天の時に遠く能はざる業務に属し、春耕し、夏耘り、秋収め、冬藏すと云ふか如く、凡て宇宙の規律に支配せられつゝ、自然の大秩序を樂ひのみならず、朝夕其身邊を圍繞する處のもの亦、之れ一として天の清淨、地の文理に埃たざるなく、草木、百花の成長を見ては、無心に自得し、雲騰り、雨施きては、風光霽月の清景に對して宇宙の大文章に、識らず、知らずも偉大の感化を惠まるとの境涯、是れ豈に哲學者の最も喜ぶ處にて有之候はざらんや。世上、圖々たる虚飾を去り、蕩々たる虚榮を排けて、靜に學理の思索に心を委ねる者を容るゝに好適の場所にて有之候はざらんや。

詩仙、パトリスか園場を勤起して、會々巖壑を穿ちて、忽然耕を停め、卒然として犁を枕にし、而も穹蒼に望して、依然一時に造化の秘密を語ひ盡したるか如き、或はホイッチェムか、冬閑家談と共に暖爐に集ひ

四海皆歸妙法の理想的發現の社會上、總ての腐敗汚濁を宗教の力を以て一掃せんには、必らず正義の士を糾合して、宗教上の精神的結合を致さ、可からざる儀と確信仕候。予は此趣義に於て、田舎を愛し、農村士人を敬するものに候。

兎に角、概して農民の心理傾向は、比較的志操朴直なるか上に、宇宙森羅萬象に對しても、寧ろ究理に走らむより、は之を直覺することと好むの風あり、智に鈍なるか如くして、情に敏なるの習に長するものなれば、宗教の布教が最も速に功を奏するは、予の信じて疑はざる處に候。是に於て予は、田舎に在らせらるる本宗の教家學者に向ひ、這個農民の心理的消息を體察して、大に布教に勵精せられ、切望するもの有之候。殊、今や、各地方共に、權門寺院の萎微として振はざる、往々に廟精せられ、切望するもの有之候。其、歸する處に迷ふの狀勢なり、豈に權教一掃の立ち前に歩を進めたるの時期にあらずして何ぞや。乞ふ、予は、本宗の教家！學者！

忍水詞兄

予は、曾て數次君に語りし予が居村隣邑の下野田なる、名も經王寺と云へる一致派寺院の住職、石川見覺師は、予と聊か俗縁上の關係もあり、殊に宗徒大會の議決したる合同提携の趣意もあれは、從來予は同寺院の改善に就て屢々同師に勸告したる條件もありて、旁先づ信徒の信仰を調養せむか爲に、七月二十八日同寺に演說會を開催致候。同日開演の概況は、

内地雜居と本宗弘法の態度

石川見覺 影山謙二

本化妙宗の眞價

にして、石川師は先づ、世運の推移に伴て外交の局面に新生面を啓き、隨て外教の安勢稍や其威を逞ふせんとするの今日なれども、我國民たる者は、鐵頭鐵尾、皇室を奉戴すると同時に忠孝一致の祖訓を服膺せざる可からずと説し、次に予は、衆に對して取寄せ置て、予が予が王國發行の「如龍修行抄」を施本し、且つ同抄

に悉く、産祖の慈誨を記述し奉りて、權實の邪正を明にし、權門各宗に對て、大々的打撃を與へ申候。殊に、予が登壇第一、同御書を拜讀するに際り……「予か或は處を遂はれ或は統を蒙り戒は兩度の御御氣を蒙りて遠國に流罪せらるゝを」……云々と讀み去り、讀み來りて「法華折伏破權門理の金言なれば終に權教權門の輩を一人もなく責落して法玉の家人となし天下萬民諸乘一佛乘となりて妙法獨繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へ奉らば吹く風枝をならさず雨暎を碎かず代は義農の代となりて今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理あらはれん時を御覽せよ現世安穩の證文、疑あるべからざるもの也」と云ふに造りて、予は坐所に聖祖往時御難の御歴史と又其、萬民救護子内安穩の有り難き御理想とに想到し、加ふるに、道勤の筆致に綾なされたる御文章を朗々拜讀し、奉れる音聲の憂々、耳朶に浸みわたるや、俄然、胸迫り、聲ふるひ、思はず睫に涙を催し候、而して其剎那、默然たる聽衆か一齊に頭をうなだれたるを相見受申候。

予か地方、由來在家一般、理義的信仰心は、遺憾ながら零點以下の有様に候、然るに斯くも聽衆か、御妙の拜聽、難有味を受したるを見て、農村人士か如何に感情に鋭敏にして、如何に其宗教的好適の機根たるかを知るに足るべく候。

忍水詞兄

予は尙ほ、報道すべきもの多く有之候得共、其は後便に相譲り申候、時下炎熱火くか如し、法のため宗門のため乞ふ自愛せられよ、

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

(八月一日稿)



伊豆伊東專門夏習講習會日記

張大磊翁草

明治三十五年七月廿六日晴 土曜

午前九時同妙大寺鈴木辨意二神覺治發大願、僑寓三國府津相仙房、乘第一東京丸之汽船、經小田原、真鶴、熱海網代之四港、以午後四時達伊豆、宿本化專門夏期講習會、旅館大阪屋、礦泉一浴、一洗途上之塵、芬、泉質澄明之溫泉也。較之、湯本塔澤等之單純泉、大覺有功效驗。當地、礦泉之煙氣蒸騰、而絕蚊虻之發育。夜間更不用蚊帳、安睡徹曉其悅不可言。

二十七日曇雨 日曜

午前八時登三塙講習寺院之佛光寺本堂。聽清水龍山師之台延餘霞、併至田中智學居士之高祖遺文成佛用心鈔。該寺則伊東朝高居城地耶、而寺內今有一石墳存。午後一時、欲極、聖祖當年之靈地、草鞋藜杖、同鈴木氏、結束上程、山行二里許。出川奈村、拜所謂聖祖當年隱匿之岩窟、窟深二間、周匝相副、一方、倚崖、露滴陰溼、不可辨其底、岩上民家斷續數十戶。中有連慶之一寺。住持導余等、到舟守彌三郎夫妻之墓前、但三重塔形、概三二百餘年之建立也。蓋連慶二字、謂彌三郎五世後人之法號、從是轉步。石徑礧礧、險路二里、出富戶村、民家數十。往々倚山築之、行至村盡、頭、則從海浦之靈場也。有寺謂蓮若寺、所謂祖岩岸頭之古刹也。斷崖壁立、漸度、岩角上匍伏、以出海岸上、未認祖岩之片影、次出左方岸尖、激浪澎湃。出沒隱顯之際、少認祖影、海來忽滅。潮去、少顯、意中正、識得。是其為祖岩。當時鎌倉捕吏未達伊東二里、殘忍酷薄、委棄、危岩上、視然放歌去。實可謂少思無慈、而非人間之所業、者、也。雖然、是不足深也。如、主七條一家、一天與乘之主、於遊、其、備、如、甚矣。朝指暮換、不知人間有、差恥之事。况此材狼群下之下吏。眼中固不認。聖祖之為、何一誤認、一箇之貪道胡僧、亦不足深、枉哉。實是危機一髮、此時天乎。將靈山之應乎。有彌三郎之一艇。乘以回漁村、亢旱食之之中、然、識別、非其常人、岩窟之保養。既度三旬、實日本無雙漁徒中之快信男子也。時已黃昏。飢、無食、宿、無家、陰雨空曠、欲詣蓮若寺、通夜於祖師室上、謀之、厨夫曰、今朝院主詣、伊東講習會、不在、院、然、雨中、暫待之、有、外、可謀之人、去而復出、謂曰、請意領了、因以脫草鞋、座、本堂之一隅、時、妙齡、尼出、筆、曰、尼固真言宗尼、而近來參籠、此、祖師室中、以收無言之行、今日已半、尼固、他家之人、不知、衾被蚊帳所在、然、能、達、文筆、堂々、長文、善通、其意、以、頤指、余等固、決、意、通夜、衾被何、撰、答、書相繼、已、半、之時、有人來、告、曰、院主歸、忽而接眉、忽而衾被蚊帳相辨、愁眉始伸、歡情殆不可言也、十時點滴中就、眠。

二十八日雨 月曜

午前七時、草鞋藜杖、衝雨出寺、陰雨益甚、歸路一里、出富戶村小學校下、蓮若寺、住持梅田恭山師。從、後來、脫、所著之外套、被、余之濕身上、以防、雨、慈惠何言。鈴木氏、不堪、見、余之濕漉、言、余等壯漢、急、速歸、旅舍、一、藍、與、晴息、路傍、民家、暫、待、之、余、亦了、其意、投、一、民家、燒、摺、以、溫、衣、山茶、一、喫、以待、、概終、四時間、而與夫來、忽乘而登、路、幸、而雨亦休、民家亭主、固、相、摸、國、石、橋、山下之石工、而、齡、已、六十、身體巨大、精力過人、今振三、貫、餘、之、鉄、錘、以、渡、世、此日雨天在家、動作朴直、出、自家、帶着之、拾

衣假金以乾三濕衣之恩惠百端夫妻之有情。憐憫至深。因知。石工漁夫等愛慈心之深。自是人間之天分。今較之。之。目下都人士之輕薄少恩。何啻天壤。有詩云。田畑(姓字)萬五郎。富戶。石工更。焚。火乾。濕衣。夫妻菩薩。母。與行數里。出下田伴還之吉田村。午後四時。還伊東之道旅。脫衣直入浴。以。洗。道途之疲體痛苦。

二十九日雨 火 曜

午前六時。同行ノ二神氏。此歸。大磯。八時出場。以聽清水田中之講義。清水講師。招余上席。始名刺。師者甲府中檀林之教頭也。應今夏之聘。來以日講。性甚嗜書。讀諸余書。深草草山師之文語。諾而歸館。次。而清水師來叩。話數時。還。猪戶山田屋之旅舍。(以下次號)

●末法時機相應主師親三德有緣之大導師

南 山 道 人 稿

佛教には正法千年像法千年末法萬年と申して、佛時機を三部に分ち以て教法の年限を示されたり、即ち前の正法像法の間に引むべき宗旨は、今佛禪律真言天台等其他のものである、後の末法の世に引むべき宗旨は法華宗であると云ふ事を、三千年の昔に釋迦牟尼世尊は經文の中に説教されて居る、尙其末法の時に至ては世の中は寸前尺魔とも申し立て、惡心なる者が十中の八九占ると云ふ如き極惡世なのである、故に末法に法華經を引むるには文殊藥王等とは御使はしなく、唯地涌千本化の菩薩を召出し、上行菩薩が御出現され

たる次第である、一言に云はば末法とは上行菩薩御出世の時を指すです

時とは五濁亂漫であつて、小を以て大を打ち權に執して實を謗すると云ふ、即ち諸君の活目致さるる、今日の状態です、今日彼の權教方便たる念佛宗や他種々の淫祠邪教が勢力多大なるは、諸君のよく知らるゝ所である、我宗祖日蓮聖人は(南條抄)御書の内に新しく申されて御座る「念佛實に往生すべき證文あらば、此十年間念佛者無間地獄と申すをば何なる所にも出でつめずして候べき歎、能々弱き事なり、法然善導等の書き置て候程の法門は日蓮十七八の時より知て候ひき、此頃の人の申す事は之に過ぎず、結句は法門には協はずして闘にし候也」と實に聖人の胸中此一文にても知るに垂るではありませんか

●機とは本末の善逆誘充滿の機根である

相應とは其時機に應じて出世し、不惜身命にして攝折時に適ひ、本門三大秘法事之一念三千是好良藥之南無妙法蓮華經を以て輕化難治の衆生を救療し給ふ、即ち宗祖御一代の活動を見聞しても知るべきである、例せば病藥相應して疾を治するが如きであります

主師親とは釋尊と上行等とは親しき父子である、涌出品に云く、是諸大菩薩 悉是我所化 此等是我子と云ふ本尊抄に云く、天台大師の云く是我弟子 應弘我法と、釋尊既に娑婆世界の衆生の爲めに三德有緣なる事は、經文に顯示顯説されて居る、其内に譬喩品は猶是蓮門一端の説である、故に眞實の大恩で無い、壽量品に曰く「我娑婆世界」と是れ主である、又云く「常説法教化」と是れ師である、又云く「我亦爲世父」と是れ親である、御祈禱經には本門段に至て大恩教主とある、久成の本佛の御跡を御繼になる上行菩薩の再

護宗祖日蓮聖人・主師親にあらすして豈何人をか主師親の名に合ふ人でありましよう、故に聖日蓮何れの御書にも、日蓮は日本國の衆生の爲めには親しき主師親なりと御自歎なし給ふ所以である、今其一二を申さば開目抄に日蓮は日本國の衆生の爲めには親しき父母なり、撰時抄には念佛者眞言師等の主君なり師匠なり當帝の父母なり、下山抄疎曉抄等に云く日蓮は上一人より下萬民の衆生に三の故あり、一には父母なり二には師匠なり三には主君の御使なりと、久遠劫來、三徳有縁の宗祖日蓮大聖人を差置て、他の佛菩薩諸天等に愚信をするは信心に似て大謗法であります、なんとなれば餘の佛菩薩等を信心すれば、道理として我主人師匠父母を輕賤するに當るが故に、大罪であると斷言致す次第であります、先づ親に背くは五逆罪、師に背くは七逆罪、主に背くは八逆罪である、既に二十の逆罪を犯す悪人となります、豈恐れ慎しむべきではありませんか、我法華宗の信者として誰か宗祖聖人を輕賤する者がありましよう、さりながら常に信敬し奉つる様なれども、病氣或は心願等の時には欲に心惑ひて、或は妙見に、或は清正公に、或は帝釋に、或は不動、或は稻荷にと四遠八荒に馳走は、宗祖聖人の御力をあやむひが故でありましよう、是等迷信の者共が憚ながら一人もありませぬのは恐らくは我顯本法華宗のみで、他の派にはまゝかゝる迷信者を見受けます、實に日蓮聖祖に相濟まざるは申すまでもなく、他の諸宗に向ふて耻づる所である、是れを念佛に又は眞言等に見よ、一念確信の故にかゝる信者は一人も無い、誠に遺憾に堪へん、能々道理を案察すべきである、我主師親の助け玉はさる者を別佛無縁の佛菩薩諸天等の力に及ぶべき、況んや清正公稻荷等に於てをや、天台の云く他方は縁淺きが故巨益なし云云、宗祖(取要抄)に云く此世界の一切衆生は他土の佛菩薩に有縁の者一人も無し、

釋の如きであれば餘の佛菩薩の利生なき事道理分明である、夫のみならず高祖の御利益も亦無し、只利生なきのみならず二十の逆罪に依て墮獄は必定である、今此三界等の文は釋尊三徳の經文たるは云ふまでも無く又上行菩薩の三徳の證文である、尤も今此三界等の文は迷門當分の文と云ひながら、何を却て之を引くやと云ふ疑もあらうが、開述顯本し終れば述の文即ち本の文なり、毎自作是念等とは是亦釋尊の御慈願の文なれども父子の御慈悲齊等故に轉用するのである、疎曉八幡抄に云く一切衆生受三異苦三悉是如來一人苦と云云、日蓮云く一切衆生異の苦を受くるは悉く是日蓮一人の苦と申す可きなりとある、如日月光明等とは是止しく釋尊が上行菩薩を稱歎なし給ふた文であります、草木心無けれども日天子に照され月天子の潤を蒙れば生長致しませす、況んや人間をやである、盲目は日月を見まとも猶衣食住の御恩を被て居る、況んや眼あらん者をやである、他宗權門の人々は上行菩薩塵點劫來の御恩を蒙むりながら、知らざるのみならず却て嫉妬し奉ること、あささしき次第ではありませんか、實に草木の如く盲目の如し、法華經の行者は深く日月現量の御恵を思て、宗祖大聖人の御恩を報し奉るべきである、宗祖録内御書に云く、過去遠々劫より法華經を信せしかども佛にならざりし事は是なり、潮の干と満と月の出ると入ると夏と秋と冬と春との境には、必ず相違する事あり、凡夫の佛になる又是の如し、必ず三障四魔と申す障り出來すれば、賢人は悦び愚人は退くなり云云、法華經壽量品に曰く、色香美味 皆悉具足 是好良藥 今留在此 毎自作是念 以何令衆生 得入無上道 速成就佛身 宗祖曰く、爾前述門にしては尙生死離れ難し、本門壽量品に至て必ず生死を離るべし、生死の

長夜を照す大燈明元品の無明を切る大利劍なり、什師曰成佛の要道は本門三大秘法に限るなりと、南無妙法蓮華經(完)

編者白す、聖祖廣大の恩徳まことに、道人の所言の如し、されど斯は誤に陥り易き所談にして、末法の大導師を通り越して末法下種の本尊と誤信せる興門の一流あれば、一方には除厄高祖、眼病守護、防火高祖あるは土中出現の祖師、あるは安産守護の祖師杯、殆んど濫觴的對境となり畢れる一致派の現状、是れ皆偏見邪信の迷網に陥れるもの聖祖の所謂信じて而も信せざるものと云はまじ要は聖祖深大の御恩徳に感泣すると同時に、聖祖の生命をすて、圖顯し給ひし閻浮統一の大本尊を信せざるべからず、斯くてこそ眞實の知恩者報恩者とはなりつらめ、讀者請ふ心してよ



●統計學上自殺を論じて

念佛一門に告ぐ

窪田貞二

道德統計の上に於て自殺と云ふとは頗る趣味ある問題にして最も價値ある研究でありませすが此に私が論じまする自殺は専ら佛教と如何なる關係があるかと云ふとを論じまして歸する處我邦の自殺者は念佛一門より起ると云ふとに論斷するのでありませす

先づ年々の自殺者を見まするに我邦では七千二百三百人から八千四百五人の間を往來する程の多數の自殺者を出して居りませす今明治二十七年より全二十二年迄六ヶ年間の自殺者を調査しませするに實に左表の如くでありませす

| 年      | 男     | 女     | 計     |
|--------|-------|-------|-------|
| 明治三十二年 | 五、〇三八 | 三、三二八 | 八、三二八 |
| 全 三十一年 | 五、三六八 | 三、三三九 | 八、六九七 |
| 全 三十年  | 四、六二五 | 三、〇三三 | 七、六五八 |
| 全 二十九年 | 四、四八〇 | 二、九七九 | 七、四五九 |
| 全 二十八年 | 四、四四九 | 二、八二三 | 七、二七二 |
| 全 二十七年 | 二、六二五 | 二、九二〇 | 七、五四五 |

是等多數の自殺者を出す原因と云ふものは何から起りて居りませすかは種々の誘因即ち原因がありませすが世界各國何れの國でも自殺者の原因として尤も多いは精神の錯乱でありませすが此精神の錯乱と云ふ内容を窺ひましたら十分の觀察が出来ませすと信じませすければ借むらくは死人に口無しと申しませすから到底判明するとはならずせん次に自殺者の多數を占むる原因は病苦に因るのと活計の困窮と薄給を歎きてありませすが我邦では是等の自殺者は殆んど精神錯乱者の二分の一位を占めて居るので左程我邦は病人が多ひか活計を立つるに困難なるかと申すに中々世界各國と比較になりませせん即ち我邦の富の程度は低ひに相違ないが活計を立てるに困難なる自殺をした方が善ひと云ふ程活計に困難でもありませせん又病苦とても今日醫術の進歩したるにも拘はらず自殺をせねば病苦を去ることが出来んと云ふ程のともありませせん何れにしても人世悲慘の極なる自殺をするのに右様の原因位で自殺するとは實に情無き意氣地なき人間否國民ではありませせんか  
然らば自殺と云ふとは如何なるものでありませすか自殺の是非善悪は須らく古人の論評に任せませすようが我邦の如きは切腹敵討などは日本の美風であつたとも云

論者も見受すすが西洋諸國では自殺は人類の奇蹟恥づべき秘密の死であると論じた人もありす亦或哲學者は自殺者は人生を輕蔑する理由にて大に尊敬すべきものであると云ひました今一層進んだ理由には畜類は自殺と云ふとが出来ないが人間の卓越したる證據として自殺をするのが出来るが尚吾人は生存場裡にある以上は如何しても自殺をする程の勇氣が無ければならぬと種々の論評がありすが蓋し吾人が此世界に出て、は生活上全きを期するは理の當然でありまして自然の性情吾人の義務ではありませんか是を性情に悖り天壽を害し義務に反し實に人世悲惨の終極に至る自殺は決して看過許すべきものではないと云ふも殊に我邦には世界各國に類の無き自殺がありす情死是であります隨分此情死なんと云ふものは合意上の自殺ですが奇怪千萬なものでありす此奇怪千萬な情死などは特に淨土眞宗等念佛一門の大に預て力のあるのです或は極端だと覺召なさるか知れませんが是には相當の理由あるとでありまして逐次述べることに致しまして諸君の判定に任かすと致します

我邦の統計では自殺者の宗旨別の調査はありませんが他日佛教各宗の消長は必らず社會の進歩と共に明かに

見一人心をなやましてありませんは各國に比較して見ますと左表の如き割合になりす是は人口百人に付ての割合であります

|     | 男  | 女  | 男  | 女  |
|-----|----|----|----|----|
| 日本  | 四二 | 三五 | 六七 | 三二 |
| 英   | 七五 | 二五 | 九八 | 二二 |
| 丁   | 七六 | 二九 | 八〇 | 一九 |
| 那   | 七六 | 二六 | 八二 | 一八 |
| 佛蘭西 | 七〇 | 三〇 | 八二 | 一七 |
| 北米  | 六四 | 二六 | 八二 | 一七 |

即ち日本の女にして自殺するもの三五、八にして白耳義壇地利に比して二倍以上の多數であります是れ情死者の多きを爲めでありまして他の理由のあるとではありません然らば此情死の目的自殺の目的は何等に職由するかは私の本論を主張する論點であります

自殺と宗教の比較は基督の宗教よりも舊教に自殺者少く希臘猶太教は舊教よりも少しとは既に研究は研究を重ねまして今や動かす可からざる論證となりて居りませす諸君は宜しく以上の宗教の教義に依りて研究せられましたならば思半ばは過ぎるのでありませしよ私は一々例證を取りて論斷を興へたきも本論の枝葉であり

なりませしよが其時ころは此宗旨彼の宗旨と甲乙軒輕が出来て來ますとせしよ殊に我邦人の信仰と云ふものは到底特度するとは出来ないの故の宗旨はと云へは眞宗然かし私は稻荷ばかり信仰して居ると私は日蓮宗ですが池上の長榮稻荷ばかり参りて居りますと云ふ様な理由で到底宗旨別に調査は出来ませした處で其れで物の比較にはなりませんが私は犯罪者を宗旨別に比較して見ましたとがありすが眞宗が一番犯罪者が多數で次が淨土で少數なるは曹洞であります若し自殺者を宗旨別に見るとが出来ましたら是亦眞宗念佛一門が第一位を占めるとでありませしよ所謂眞宗一門の信徒は各宗旨に比較して必らず信仰の程度が低いと云ふとは誰も許す處でありまして自殺乃至情死などを爲すものは高等の地位にあるものより下等の人物に多いとを見ても明かになつて居ります更に進んで論じまして念佛一門の教義其物からして厭世悲觀のものでありまして形式的に王法爲本などと申しましたも我宗の如き國家と共に睦々光を争ふ大乘法花經の教義と到底比較になつたものでなく天地雲泥の相違があります尙ほ且我邦の自殺者は男に少くして女に多いのでありませす可憐なる女にして斯る大膽なる自殺を試みるに至りますは

ますから後ものとして致しますが佛教者に自殺者尤も多數を占めて居るのであるとも亦争ふ可からざる事實で佛教國の統計は僅かに我邦位なもので外にはありませんが統計家は厭世の意味を含める佛教は我が國人自殺の強因であると迄論じて居ります

論て厭世の意味を含める佛教とは我邦に於ては何宗でありませしよの先づ各宗の宗義綱領に則り所依の經教に従ひまして論じませすれば恐らく淨土三部經よりして善導法然親鸞一派末流を指して厭世悲觀の念を我邦人に興へたるものとするより所詮他に求むるとは出来ません彼一派末流は常に三界の教主釋迦牟尼世尊の淨土なる此娑婆世界を以て穢土と稱し疾難穢土厭離娑婆世界などと稱へ西方極樂世界を往生を勸めて娑婆即寂光の觀念を去らしめ往生は尤も安樂にして寂滅は爲樂の相なりなせ、或は一、托生願生菩提と實に數へ來れば念佛一門が厭世悲觀の觀念を興ふるとは今更私の喋々する必要はありません試に彼等が文章を見れば十分に證明するに餘りありませしよ故に是等の厭世觀よりして淨瑠璃戲作演劇等皆是に依りて尤も沈痛憂鬱の形情を寫すに至りませした遂に自殺は恐るべきもので無い往生安樂の始である情死は何んでも無い未來は一蓮托生

であると思ふに至りまして斯くも自殺者を多数我邦に出します其原因は念佛一門教義の結果ならんと思ふに可なり。能谷直實が僅かに教盛の首を斬りて無常を感し蓮生坊となり佐藤宗清が突然妻子を捨て、西行法師となるのも甚しきに至りては念佛一門の開祖善導和尚が早く安樂を願ふて柳の樹に首を絞るに至りたる如何に念佛一門の教義が自殺の誘因をなすのであるかは明かでありませう。自殺者のみならず國家進運の發達と念佛一門の教義が到底杆格容るゝ所ではありませぬ。私には是にて本論を終ります。が今一層統計學上佛教各宗の比較研究を積んで諸君攻學の研究に資し其一端ともならば私の幸榮是に過ぎんのです。

(完)

### 夏期講習會記事

#### 第二回 本化夏期講習會彙報 第二信

奇 峯 生

◎第四日 講演 討論會 (廿九日小雨)

密雲蒸々降りみ降らすみのな景色、磯の松枝に鬱然と霞立ち上る日暮の、森に籠りたる朝暉は、實に太古の

ひ三返唱題して去る、時に田中講師番外一番として發言して言論の中止は不當なりと注意を與へらる、於之議場沸然恰も九鼎の重々たるか如とし、曰く議論の中止を命せしにあらす、暴言を抑制せるなり、否ながららず、言論の中止なり、身中の虫、謗法墮獄等は妄言にあらす、他を破折するの用語なり、否なく暴言なり苟も宗教家として不穩當の態度なりと甲起乙仆遂に停會を命せり、頗る當日の奇觀活劇と云ふべし。該講習會の異彩の現象と云ふべきなり時に午後四時閉會を告ぐ、悲雨蕭々として終りに柴門を鎖せり、本多講師再三來電あり來、不來、來、等の意味なり。本日入會者井上吉次郎(甲斐)羽田柳兵衛(同上)寺島要藏(伊豆)山根顯道(東京)小島傳次郎(東京)一色富次郎(東京)佐野九兵衛(横濱)吉川ミヨ(同上)岩田ヲヤ(同上)池上ツネ(同上)長嶋ヒサ(同上)小島信一(東京)横溝伊助(横濱)横溝常太郎(同上)加藤文雅(東京)河原銀藏(同上)河原慎男(同上)太田鳳仁(京都)今井日省(下總)高橋寅吉(同上)壽智海(同上)等の人々にして傍聴席には警官醫師各宗の僧侶學校の教員等頗る多きは此れ休業日なるが爲めなりと

◎第五日 御靈蹟參拜 (三十日曇)

統一圖報

觀影と偲ばれぬ。午前八時定刻より講演は清水講師の台當の十異目、愈深遠の境に進みぬ、田中講師も既に序分を述演して正宗分の本領に入りぬ、本日の會員又傍聴者は總數一万余名遠路七八里より來る人多し。

午後一時討論會に入りぬ、題は「宗門擴張の策如何」にして制度教育布教教義の四條目にて此の内何を先とするかてを討議す、座長は柴田にして議員は凡て四十七名より成れり、先づ大橋君は現今の所謂僧侶の全廢論より始まりて、撞出君の大反駁あり、甲論乙駁、教育を可とし、布教を是とし頗る形勢の不穩を呈せり時に躬ら我れは先天的臨睡腰の性癖を特粹とせる論者なりと表榜して伊東君は昌んに坊主攻撃に一大勢力を注げり其の皮肉暴言聴くに堪へざるものあり小倉君此に大駭撃を加へ現今の宗門の衰頹は單に僧侶の廢敗に根源せるに止らず其の一半は確に信徒其の者の責任も負ふべきなりと云や、伊東君は厥座扼腕して獅子身中の虫と罵詈を放ち滔々漫言不得要領の言を弄す小倉君之を座長に停止を請求す座長之を注意して罵詈誹語中傷的の語を中止する事を命じ、言者は言論の中止を命せられしものと誤認せるか奮然座 蹴り御聖像に向

午前四時一同旅裝を整へ列を正し隊を伍み嚴肅なる歩武を調へて客舎を出でたり、總指揮官は地理を案し、案内者を督して行進を起さむとせしも、如何せむ夜來劇雨路を壞ち、霧を埋め突兀たる岩角を屹疊し、濤々たる泥道塵を奪ひ、歩々は頗る艱厄なり、爲めに隊伍を解きて自由の躰體に任せき、右舷を左に支へ、前腕を後踵に柱せり、而て丘より山に、險阻より海灣に、曲浦より長磯に、一昂一底、離宇短亭を送迎して前九時川余村に到りぬ、先着隊は寫真器を裝置して將に岩屈を撮影せんとす、一隊は御巖洞の佛前に於て讀經三昧に入り、晴昔上原彌三郎氏の供養於法師の當相を追懐して轉た感泣に堪へざる事久矣、張大孫氏の感懷は忽ち琴線に觸れて「蓬中漁聖回、火樹焚妻手、歲早厨無米、三旬信奉厚」實に偶成にあらざるなり、其より船守氏の善提寺たる蓮慶寺に詣でぬ、鬱蒼たる森林を負へる叢敷の中、幽邃人を襲ふ所、茲に彌三郎夫妻の墳墓は長へに苔蒸す下に横はれり、一株の香木一莖の精華を手向て、些か鴻恩の一塵に酔ひぬ、一隊は現住川口氏の麥茶と煎餅の饗應に渴を愈し、村長鍋西氏の懇切なる送迎寺檀信徒の親厚なる歡迎を謝しつゝ、笹海ヶ浦に池を向けぬ、峻隘なる鑿開の道を越へて迂曲



透進、轉々々々、遂に奇崑突兀若磊鬼たるの所、奔騰せる白波濤々として宛然百萬の大軍の突賊に彷彿たるかど惟へば、乍ち微々たる細沫泡爛となりて所ならざる白曇を露かしむ、奔虎の如き危巖、飛獅の如き時壁の上に土佐箱の如き松の障路の風彩、佳絶壯快を連呼して去るに忍びざるなり、漸くして正午蓮着寺に達す、此寺は一見古色蒼然の風致あり、大門の兩側には數抱もあるべき古杉老松擲擲等茂然として亭々雲際に冲す、本堂の清涼なる、庭園の修繕等頗る養者をして一種の羊貌に瞻望せしむ、夫れより日蓮ヶ岬なる粗岩に詣りて、艇斷せる絶壁數十丈の直下する所碧潭翠著、奔湍して水紋高線を爲すの所、洋々たる大瀧の大波瀾、潮去り潮來りて辛ふして其の粗岩の眉貌を見る事を得るなり、巖落たる巨崑常に轟然として翻弄せらるゝの真境を目撃せるもの、豈に誰か傑然として轟轟に動かされざるものかある、唯々此の至驚至愕の處果して、聖祖を流し去れり云を聞かば誰れか歌々咽鳴の感激に打たれざるものかある、大森氏即ち曰く「潮去看斑組、潮來沒組顔、觀斯危殆處、不泣非人間」寫しぬて妙なり、午後一時廿分此の聖地を背にして、歸路に着きぬ、一半は海路を一半は陸路を辿りて

復れり、時に午後二時半と又は五時半となりき、本日該靈地參拜の人は清水講師を始め六十八名、本日來會の人は鷺塚清次郎(東京)鷺塚昇(全上)園岡亮就(伊豆)關可鳳(千葉)増田鳳明(千葉)高須芳郎(東京)河野君(東京)森田三郎(伊豆)原田健二郎(伊豆)等の人士なり

◎第六日 講演 幻燈會 (三十一日晴)

前日の疲勞を治する爲め午前十時まで室内休憩の時間を給しき、此の時より清水講師講演あり午後一時より田中講師の講演あり、然るに午後の時間を多く費せし爲めに本日の討論會の續論は遂に流會となりぬ、一昨日の失敗を雪かむ爲め經營せる作戰計劃も水上の泡となりぬるぞ憐なる、本夜七時より紀念大會實況寫真幻燈説明を熱心なる山川氏の辯舌に依りて開かれぬ、聽衆老幼三百名に上れり、無限の感化と日宗の元氣とを鼓吹して、臨底深き所我か宗の本領を印刷して餘りあらむ、散會後十一時なりき

◎第七日 講演 公開大演說會(八月一日晴)

宿雨頓に霽れて眺望瞳眼滿目更らに新なり、體格たる漆音、纏涉たる遠波、朝歌に映射して銀波金色、蒼洋碧水とも擬ひ天どもまごころ懸野、真鶴、初嶋、大

東雲、此ど天諸童子の美容妙技なるべし、午前七時開講清水講師の台當十異の大綱は漸く進で、攝受折伏開導異、三學三秘立宗異等に深入せり、次に田中講師は愈々正宗分の深境に進めり、午前十一時頃より廣告の爲め全市街を太鼓を以て宣傳せしむ、午後一時過より參參伍々當地東座なる劇場に押寄せ來りぬ、二時開會を宣言しぬ、即ち

開會之辭

幹事

國家の興亡

小倉豊三郎君

南無

加藤 文雅君

日蓮上人の大本領

山根 顯道君

日蓮上人開宗の根本義

武田 宣明師

等の諸君にして何れも當代白眉の大思想家、大雄辯家にして小倉君の語調明確言々皆な活氣を帯びたり態度は滿場の視線を一點に集め、加藤君の快調、悠々不迫深痛難澁なる問題も、平易簡便に解釋し去りて、人をして滑稽と感服とを一時刻に感起せしむるの談術は、蓋し近代の名物辨士たるべし、山根君の演説は頗る眞摯なる正道權理を經緯として論理的に論說せられ、稍學者的に本尊の統一を鼓吹したりしは、大に價値ある

の特點なり、次に滿場の拍手喝采を以て迎へられたる武田師は、徐々として長蛇の叢中を走るが如く辨論は所謂師の宗教觀なり、宗教は所別して三あり、現世教通世教及現世教なり、現世教とは淨、基等の宗は之に屬す、通世教とは禪宗の如き、又た現世教とは純粹なる眞義に於ては本宗の如きこれなりと、其の理由説明略解等頗る細緻なり、從來の破折家は他宗を消極的方面に重を掛けり、師は積極的根本主義に立論せり、前者は教權的に各派を駁撃せり、後者は近世思想の批判の上に根柢を据へたり、特に倫理的方面に重きを視たるは大に注目すべきなり、則ち現世主義とは云へ神教の如きは自我自利主義なり、斯は妄誕なる現世にして亡國の教なり、現象の世界は實在の本佛即ち久遠本佛の大覺圓滿の大發現地なり、現象界は無活動なる死の界にあらで自在の進歩を爲すの寂光妙土なり、人は不完全なる自己にはあらで本來久遠の昔より圓滿なる人格を有するものなり、決して可卑可屈の三身にあらざるなり、英の紳士、米の國民は自ら稱して大神士大國民と誇る此の大抱負は隨て大民族の主となるの大元氣なり、大精神なり、實に此の生氣の燃る所、是れ日蓮主義の大要素なり、日蓮上人の偉大なるは其の性格の崇高な

るが爲めにあらで、法華經の大真理に依るが爲のなり故に法華經と祖書とを真正に信仰する人は、此れ偉大なる日蓮上人の大人格の一分を證悟する事を得む、此れ我祖の大本領なりと論述せり、時に後六時半なり茲に大喝采を以て晝分の終を告げ來會者約八百余名に更に夜分に來聽の旨を告げぬ

後七時半夜分の演說會を開く

開會之辭

靈界の活泉

柴田 韻秀君

國浮始顯統一の大本尊

釋 覺 圓君

統一の大本尊

鹽出 孝潤君

大國民の本領

増田 華道君

等の新進辨士にして聽衆無慮七百五十餘名ならむ、如此公開大演説は實に近來の大會にして、他宗教徒若は有名なる政客も猶ほ能はざる所なりと、浮評噴々たり此れ本化廣布の機縁熟するが故ならむ、蓋し此の演説は將來に向て一大光明を放つべきは吾人の深く信する所なり、警官の其の視線が頗る密なるは此れ道師布教の結果ならむ、亦た活氣に充實せる我か宗なるが爲めならむ

第八日 講演 科外講演(二日大演)

望に開演せば詩吟歌琴立所に奏らざるなし、其他瀧ヶ澤の瀑布、御嶽の瀑、嶽水の遠望、朝光寺の幽棲地には奇妙なる火山灰の壯觀、松月院の著名せる蘇鉄樹、日暮の森、入道祐親の古墳、伊東の城趾等を歴遊して永久の健忘録の大半を埋めぬるは、之を本會員の美想なるべし、臨田講師本日來會せらる

第十日 講演 閉會式 撮影寫真(二日雨)

朝來深き霧は終に細雨となり、又驟の如き驟雨となりて半天より落塵せり、午前八時會員一同相集まり臨田講師の「土宰御書」一篇を講せらる、臨田講師は過般青森縣の凍死軍人追吊會に管長代理として頗る雷名を轟かせられて歸錫せらるゝや、直ちに一席なりとも講述して、聖祖に鴻恩を酬ひ玉ひ、會員に懇信を計らむとして、遙かに山鶴を枉げ玉ふは深く吾曹の感謝する所なり、而も日頃の淋雨の爲めに道路壞たれて車馬も通せざるに勞を憶はず、苦を厭はずしての來臨なり、可感哉、可謝哉、午前八時半開講十時に至る、次に田中講師は結願文として「成佛用心鈔」を朗讀せらる、開は宛然偶々此の會谷殿御返事が建治二年丙子尺月三日に契合すれば眞に奇異の念に打たれるの感あり、觀想特に深かし、

午前七時清水講師は例通りなりしも茲に單名五重障顯異、但信慧觀立行異をも終講となりぬ全論題をも論結となれり、次に武田宣明師も科外講演の懇請を快諾せられて「我祖の世界觀及人生觀」の問題の下に滔々二時間を辨述せられぬ、斯は單に概論に過ぎりしものなれば、他日完全なる全論は講義録に抄録せらるべきを述べられたり、後一時に於て撮影の豫定なり開は伊東朝高氏舊地に於てなり、此の庭園は奇崑怪石にて丘の前頗より懸垂し、蒼然たる曲松巖を擁して極まる所赤白の山百合嬌美相ひ競みて點綴せり、其の下に綠青々たる温泉池あり、鋭鑿池魚を喰せる鮎大の鱒魚あり其の配置の妙、彩點の奇、池に架したる切石橋の屈折等實に鎌倉時代の古風の遺物なり、去る十五年に始めて發掘せるものにして全く今は歴史的の模範物となれり、此の古園と我 聖祖門下とは特別の關係を有せるものなれば紀念寫眞の撮影地と定めしも雨の爲めに延引して遂に流れとなりしは遺憾なれ、雨少し霽れたればとて當地の名所舊蹟巡覽を試むるものあり則ち「伊東十二景」初島の漁火、松川の逍遙、横磯の群鷗、亭子の宿鶉、葛見の古社、松原の歸帆、音無の神事、五山の晚鐘等は皆な雅致あり風流ありて、一たび其の眺

閉會式

澗甘露法雨、滅餘煩惱炎の法樂の中、第一梵鐘の響と共に會員贊助員、講師等一同着席せらる、其式次は

- 一、最敬禮 (合掌立拜)
  - 一、閉會の蓋 發起員總代 花房 秀
  - 一、謝 辭 會員 總代 張 秀 則
  - 一、謝 辭 會 員 村上 禮子
  - 一、全 全 齋藤 要八
  - 一、祝 辭 贊助員總代 山根 顯道
  - 一、萬歲齊呼 幹 事 齋藤 海實
- 等にして何れも嚴肅なる式場係の指揮の如く、佛祖の寶前に於て最敬禮を行なひ、儀容正格、朗音颯爽、抑揚あり、頓挫あり、高調にして壯烈なるあり、悲音にして憤慨なるありて大に滿堂の人をして流涕歎歎に咽ひぬ、特に七十三歳の老軍醫なる張秀則氏あり、八才の淑兒村上禮子あり、質朴温雅の校長齋藤要八氏あり嚴肅なる宗教家の態度を保持せる山根顯道師あり、かくて式全く終りしは午後〇時十七分なり、夫より堂前にて一同撮映し、又講師は特に撮眞せらる(完)

# 統一彙報

●岡山通信 岡山市に於ては能仁事一師主となりて常々活潑の運動あると云ふが客月十二日も例の篤信會の演説會あり聽衆數百名頗る盛會なりき、則ち左の辨士演題の如く

- 學問と宗教 保江 衷
- 宗徒宜く本領を守れ 吉田 完亮
- 理智と信念 原田 容廣

行門に於ける自力と他力との調和 能仁 事一  
諸氏各得意の論道 教益いや盛んなりき(中川事顯報)  
●岡山第二報(中川事顯子通信) 岡山の地には常に正義正法の布教を息まされども法誘の輩は未だ絶つに至らず同志者の以て遺憾とせる處也、加ふるに先づ頃より虎列刺病大に流行し二旬にして千名以上の死者を出す亦猖獗を極むるものと謂ふべし、我篤信會長能仁事一師等は迷信途に衛生を重んぜず延て悪疫を誘介するものとなし客月廿一日同會幹事談合の上同縣知事と諸事打合せ同二十四日佛敎衛生演説を催すことゝなし三新等社張廣告等夫々準備をなしたるが恰も好し日

宗新報記者中川觀秀師の來問せるを以て醫學博士桂田富士郎君及能仁師は統一團支部長の名を以て各辨士の名を廣告したり當日は別に勇ましき廣告屋に廣告をなさしめたり、さてイヨク定刻午後七時となれば第一に能仁師開會の趣旨を終り

- 次に 衛生講話 桂田富士郎君
- 次に 信仰の墮落と宗門の前途 中川 觀秀師
- 次に 萬祈を修せんより自己の信念を確立せよ 能仁 事一師

以上の如くなるが中川氏の辯論其議當を得て而も聲調の緩急其度を得大に聽衆をして満足せしめたり桂田博士は衛生と佛敎と如何に密接の關係あるかを説き而して虎列刺豫防の法方を述べたり能仁師は元來能辨の士輕快の舌もて迷信の如何に恐るべきかを説き迷信と惡病等の關係を述べ而して正信を奨励して降壇す其間中川横太郎氏の飛入演説ありたり傍聽者は市會議員醫師最も多く新聞記者等も見受たり午後十時閉會せり  
●第八九教區通信(横山生報) 布教義に致め々々怠りなかりし八九教區各寺院住職は、辯法嚴誠の宗訓に範り、聖意を鼓吹してより、初は人の集ふてしあれば、或くこの辨難の難ならざるなく、况して檀家籍の四

次、管事或原啓門師之れが賞状を傳達授與せられたり其狀左の如し

賞状 福井縣越前國足羽郡社村加茂 竹内 久 藏

一開目抄 如説修行抄 二部  
右は貴方從來より妙法華宗徒タリシ處顯本法華宗妙經寺住職大學院内藤知厚の懇説を享ケ翻然經卷相承の妙旨を領得し發心懺悔本宗に隨順改信なしたるは是則捨惡智識の負にして誠に奇特の至なり加ふるに一家舉族異體同心の誠信に住し内本尊奉安式を實行し外寺門及住職を輔翼なす等信法の本分外護の任を盡したるものと謂ふへし因て茲に之を賞むす  
總本山 妙満寺  
明治三十五年五月廿八日 貫首大僧正藤森日遊

## 千葉縣巡教日誌

(大僧正本多日生上人監督布教)

隨行員日記

顯本法華宗は千葉縣下に其寺院の大多數を有し居り俗に七里法華の靈域と迄云へるも門外より敢なきは却て人心に惰氣と起さしめ信仰界の墮落甚しくして靈域は翻て信念荒廢の地とは爲れり、近年本多師の他地方に於ては頗る監督布教に届きしを以て殆ど改革の實舉り

の三分は不歸依の聲やむこともなかりしが、などで顯本の慈光、普く衆生の信根を薰開して照被せしめざるの理やあらん、今は宗法の体義すでに定まりて服信のもの益々多きを數ふ、中にも竹内久藏氏の如き檀信徒の模範として見るべく、その功徳決して一隅に没すべきものにあらず、氏が家はもと真宗にして母室は我妙門に生れしも故ありてこれに嫁す、念佛無間て論斷の明かにしてまた如來意たることも知れども世に憚りて改むるなくんばいよく偽佛者なりとの事を悟りて其區内八十餘戸近郷數千百戸念佛徒の中より只獨り捨邪歸正して、遂に本妙法華宗木田妙満寺の檀徒となりしが、其後内藤智厚師の假借なく、門下各派の背祖非を痛呼せるより之を傾聴して思惟して曰く、己れもと念佛を捨てたるは聖旨を奉せんとなり、門下の各派宗意作法兩つながら祖意に順せざることは現狀として輕ふへからず、もし今機にして宗意を尋ね、正信を把らざらんか、うは最初念佛を改めたるの由をさきに了んのみと、その後屢々各正師の交説を審聴し大に領得して一家悉く終に再び發心懺悔して本宗信徒となる  
本山は特に其決意を賞し、五月二十八日妙經主内藤智厚師が舉行せられし、開宗紀元六百五十年紀念會の席

しも獨り千葉縣は其緒に着かでありしが本年は千葉縣の改革期に屬し夫れが着手あらんとせる折から恰も好し客月廿八日内務省よりは藤乘管長辭職の故を以て本多師へ對し管長事務取扱を任命ありたり、されば此機を外すは善からじとて縣下の僧侶一般へ對し訓諭の目的を以て本月三日日本多大僧正には事務取扱兼監督布教師の資格を以て僧正清瀨眞雄僧都今成乾隨僧都山根顯道及統一團松尾英四郎を隨員と爲し午前七時宗務廳を出發なしぬ、同八時本所驛發同十時大綱驛着、宮本國寺(五六教區)に着きしは十時二十分なりき

井上、渡邊、草切氏等已に到着ありたりしが該區は未だ全く招集狀の着し居らざりしとかにて來會者少かりし、午後四時清瀨師先づ立て今回巡教の理由を述べ更に教義の大切なる事教義と教團との關係を説き進んで社會の大勢より小闘争の一教團に不利益なることを誦ひ教家の本領僧徒の天分を説き了れり

次に本多師登壇して管長事務取扱を受けたりし理由、此際親しく訓示すべき必要ありしを以て巡回したる所以を云ひ、さて開祖が一教團を獨立したりしは區々の私見にあらざりして公明なる正法護持の大精神より出し事より、本宗は三秘五綱を以て主義生命と爲す由に及

び而して其流をくむ處の僧徒が宗義宗意を忘却し只に私利を打算し情實に拘泥して進退を爲すのみならず宗家、最も貴重すべき宗意を没却し去りて本尊を輕んじ無道心に終り布教を爲さず甚しきに至つては一大邪見を空想して祖師の傳燈を滅せんとするは其罪障獄なりとて淳々懇々心得違ひ無きやう訓諭せらる、此日當寺住職坂垣師は何にくれと心附ありたり、

四日、朝八時二十四分の瀛車に乗じ先發隊として清瀨今成山根の三人先づ本納に向ふ、本多師に於ては十二時三十分の瀛車にて松尾氏を隨へ出發する窪田純榮師訪ひ來りて同じく隨行す、やがて本納に着せば三四人の出迎あり腕車を驅つて蓮福寺(四教區)に着す其區の僧員集るもの凡二十名午後一時清瀨師巡回の大意を述べ次に本多上人出席あり前日のと略同し意を以て述べられ降壇さる、さて此地は住職大塚氏は公衆にもとて會場を設けられ、手摺配意せらる、處あり依て松尾忍水居士「捨歸邪善」の題下に演ずる處あり次に今成師「本宗信徒の本領」を述べらる、聽衆五十名ばかりの法益を與へたり、さて時刻か迫るを以て一行は今成師を殘して四時三十分發の瀛車にて茂原町旅館大和屋に投宿す、今成師は終列車にて來る、

五日朝雨あり午前八時一同觀車を雇ねて茂原を立ちし日來光寺(三教區)に至る此區は來會者十三名、午後一時木村乾中師の紹介に依りて松尾氏立つて管長辭職前後の模様を報告す蓋し管長撰擧に付此地種々の流言あるを以て木村氏より關係少なき氏に辨安することを要めし所以也、次に今成師流言語に就て警戒する處あり次に清瀨師昨日演せし意を以て述べ、最後に本多上人御出席親教の理由、前事務取扱當時の狀勢、其後の經過、歴史は最後の判決者なる旨及正義正法の大功にして教義あつての寺院僧侶なることを云ひ決して宗義を没却すると勿れと訓示さる、此夜當寺に一泊す、住職山田寛祐師られ、配意ありたり、此夜森安、成島師等は天理教々師と問答すべく語り居りたり其後如何になりしや

六日、朝雨あり雨中押日を出發す、千葉行の列車に乗じ大綱町に一時間ばかり休憩し十時三十分東金町に着く出迎人數名あり主薦者は錦織大僧正等外十七名なり午後一時清瀨師巡教の理由及宗教家の本領を述べ次に本多師御出席宗門の組織より顯本法華宗とは無形の主義、法、道あるにて此もの無くんば即ち道なき事を説き尙ほ本末を誤り輕重に迷ふなからんとを述べられた

り、住職小高受節師の配意されり、午後三時一行四人連車にて片具本隆寺に向ふ四時頃着す今成師は東金に暫し滞在せしかば少し遅れて五時頃來らる此日は最早用あらざればとて清瀨山根松尾三人は松井道安氏の案内にて九十九里灣頭に遊ぶ此日風あり狂浪怒濤岡丘より高し此夜此處に一泊す

七日、當寺(第七教區)に來集する僧員二十名以上午後零時四十分着席今成師先づ立つて今回本多上人の事務取扱任命の顛末を述べて訓令を遵奉すべき旨を云ふ、次に清瀨師立て局面一變に就て人心の轉機を促し最後に本多上人御出席、法類黨派を重んじて宗旨宗義を輕する勿らんとを諭し宗門の成立組織を述べ法華經行者の心すべきは第一離嫉妬行なりとて不及者の嫉妬心を教いましめ第二に離嬌慢行なりとて成効者の嬌慢心を教訓し尙ほ智慧を飲ける道徳をいましめ、次に住職の本務宗憲宗規の本旨を説かれたり、さて此近隣の信徒等七八十名は何時の間にか集り來り道と聽く處あらんとす、依て午後三時松尾英四郎氏は「宗祖最後の判決」にて又山根顯道師は「三大秘法」にて何れも懇々たる法談を終へたり、午後六時本多清瀨兩師は成東迄出發さる

八日 午前五時過今成山根松尾三人片具出發す本多師等と成東にて邂逅十時三十九分成東發佐倉に着す本隆寺河野師頗る配意さる

佐倉經胤寺より停車場迄は二十丁余あらん管事及僧侶二三及經胤寺檀家總代等數名停車場迄出迎ひ車を連ねて經胤寺に着く集るもの多からず午後二時清瀨師前日來の如く趣旨を述べ次に本多師僧侶の自分を説かれたり東金のに同じ、さて別に本堂にては一般聽衆への演説あり(僧侶へのみの監督布教なりしも既に廣告等爲しあればとて本多大僧正も出席あり)

- 開會の趣旨  
 法華經の價值  
 信心の三大要義  
 信仰論  
 受持成佛の要義  
 吾人の本体と佛敎の本尊  
 聽衆百五十以上皆靜かに聽き居り多少信仰の種を講きたるや疑なし、住職綿貫師頗る諸種に配意せられしを謝す、

九日 午前七時四十分佐倉發、千葉にて一時同休息九時過千葉發藤我に着す廣部水真、川島守信來會し同じ

も頗る然る處畫に由やんとせられしが遂に同二十五日に至り老管長は辭職せられ 廿八日内務省は特に品川妙國寺住職大僧正本多日生師に管長事務所扱を命せられ本多師は直ちに印綬を帯びて僧都小川日豊師を教務總監に同山根顯道師を法務部長に同井村尚也師を教部長に夫々任命茲に新宗務廳を組織すると同時に此際多數寺權を有する千葉縣下に於て心得違ひの者なき様訓示するの必要あり訓示に代ゆるに親教を以てするとの意味にて清瀨貞雄今成乾隨山根顯道松尾英四郎の諸氏を従へ別紙巡教日誌の如く本月三日より九日迄一周間の巡教を實行せられたるよし該宗の前途正義の光明益々輝耀たるものあらん可祝々々(園末又新生)

### 僧俗同信會加入人名表

- (靜岡縣)  
 池間 治作 藤澤 與平 藤澤徳太郎 鈴木 岩吉  
 飯田 惣作 鈴木 文吉 原川 榮作 森 金太郎  
 田中徳三郎 磯部 儀作 匂坂 勝藏 杉浦政太郎  
 (千葉縣)  
 横山 會章 栗原 日灌 齊藤 義監 (以下次號)



く隨伴して九時四十分濱本行寺に着し、竹内管事外信徒の出迎あり此日來會者二十六名例の如く午後一時本多師并に清瀨師の訓示あり而して別に本堂にて公衆への演説會あり佐倉と同じ意味也、

- 開會の趣旨  
 人の最も重んずべきもの  
 信仰心とは如何なるものぞ  
 大義名分  
 佛敎統一主義  
 聽衆八九十名法益亦妙からざるべし、午後六時の濱車にて一同歸京の途に着く、山根、竹内管事外信徒諸氏の見送りありたり、住職長谷川師 配意多し茲に謝す(完)

巡教に就ては其處感は隨筆として山根、松尾の二氏記す等也  
 ●顯本法華宗主權者の交迭 同宗管長大僧正藤乘日遊師は八十五歳の類齡にして春來老衰且病氣の爲り一切事務を見る能はず從て屬僚のもの兎角專横の處置をなせしとかにて爲に門末の間に正義淫祠兩黨相糺り紛擾其熱度の高め來りうれかあらぬか八月初旬内務省よりは特に書記官を藤乘師の自坊に派して取調ふる處あり

### 特別廣告

### 謝辭

護法眞信の念慮厚き卿等が多なる贊助を玉ひたる本化門下第二回專門夏講習會は豫定の如く其閉會式を伊東の會場にて於て首尾よく舉ぐるとを得たりこれ佛祖が加被力の臻す所とは云へ卿等が大法護持の至誠の顯はれたるものと云はざるべからず生等不肖自ら量らず發起者たるの名を濫し學問の忙課屢々卿等が高見の力に頼りて其責を全ふするを得たり眞正なる愛護者に於て忘る能はざる所也且つ失禮講義録出版の如きは重て卿等が贊助を仰がざるを得ず異くは長く誘導を玉へ聊か以て謝辭となす 敬具  
 八月 本化門下專門夏講習會發起者橘香會員一同

### 改名廣告

拙僧儀從來友芳と稱へ居候處今回日隨と改名致候也  
 越後糸魚川町經王寺住職

友芳改 小林日隨  
 辰知諸君

### 緊急廣告

今般事務擴張に付左の處に移轉仕候間自今通信其他該處へ願上候

東京市下谷區谷中清水町拾五番地  
(上野公園動物園裏門附近)

明治三十五年  
九月十三日

宗徒大會 決議實行期成同盟會創立事務所  
開宗紀念大會殘務取扱事務所  
常設委員 小倉豊三郎  
中川 觀秀

主筆加藤文雅

## 日宗新報

行發回三月每

▲定價一部金五錢十八冊(半年分)前金八十五錢卅六冊(壹ヶ年分)前金壹圓六十五錢  
▲送金は池上郵便受取所へ振込み(日宗新報主任加藤文雅)と御指定の事

主筆北友

## 北友雜誌

行發回一月每

定 價 一部金六錢  
半年 六部金卅錢  
壹ヶ年 十二部金六十錢  
爲替は函館惠比須町局振込郵券代用一割増

發行所 市相館

## 北友雜誌社

主管佐野貫孝

## 日本之柱

毎月一回(十五日)發行  
定價一冊金五錢一ヶ年前金五十錢爲替は大坂高津局振込郵券代用は五厘券一割増

發行所

大坂市東區西高津  
中寺町五一六番

## 立正社

主筆武田宣明

## 教友雜誌

毎月二回(十日廿五日)發行  
定價一部(郵稅共)前金五錢一ヶ年前金壹圓貳十錢

發行所

甲府市  
稻門村

## 教友社

### 幻燈布教廣告

聖祖開の祝典紀念として茲に(獨逸製特)大幻燈器を購入したり謹て贊助の道俗諸氏に告ぐ

追て宗門道俗諸氏にして右幻燈開會の希望者は無報酬を以て出張布教すべきに付き下名の住所へ宛申込さるべし

千葉縣印幡郡川上村小谷流永福寺

中村 乾信  
日暮 立靜  
萩原 宗監

主筆田中智學居士

## 妙宗

發行所

相模鎌倉  
栗山

師子王文庫

▲毎月一回(六日)發行  
▲每號大附録附  
▲定價一部金十錢(附録共)  
▲郵稅金一錢壹ヶ年前金壹圓貳拾錢(不要郵稅)  
▲送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事

稟告

- 一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
- 一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前金一圓八錢郵券代用は一割増但五厘切手に限
- 一講讀申込の節は住所姓名を階書にて認むべし
- 一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事
- 一本巻は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
- 一廣告料は五號活字廿四字詰毎一行金七錢なり

明治卅五年九月十五日印刷發行

發行所 井村 恂也  
編輯人 山根 顯道  
印刷人 鈴木 暲學

發行所

## 統一團報部

東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地

# 統一

## ○本 號 要 目

日蓮上人の冷靜……………松尾忍水

神社と眞宗教……………同

佛教統一の畢業……………窪田孤松

佛教上の評論を試じ……………石波江東

論 評 一 束……………清瀬華城

予の所謂宗教文學を鼓吹する所以……………松尾忍水

轉 迷 悔 語……………今成乾隨

斷 腸 爰……………原田容廣

懺 悔 錄……………太田伊代平

教用三日の旅……………山根青村

老 翁 寫……………林日

是 風 雨……………孤松

轉 便 登 録……………は

懸 雲 兄 に 酬……………同

遊 教 日 誌……………同

雜 習 會 日 記……………同

布田王寺本尊勸請式改善圖末……………上

五眼勸信談……………小林日

漢詩韻文俳句等……………至



(明治三十年二月廿四日第三號發行 每月一號十五日發行)  
 (昭和五年十月十五日發行 第一號九寸號)